

ポスター8

ポスター発表(研究)

日本生育外国人児童の低学年時作文の縦断的分析

—「～て」節に着目して—

工藤 聖子(早稲田文化館日本語科)
左 雪姣(東京学芸大学大学院生)
齋藤 ひろみ(東京学芸大学)

研究の目的

日本生育外国人児童(以下日F)の小学校低学年における作文力を、文構造の変化から捉える。本調査では、1・2年生の作文を複文の連用節と並列節にみられる接続形式に着目して分析し、日本人児童(以下J)、母国生まれの児童(以下母F)との比較から発達の特性を記述する。

研究方法

外国人が集住する地域にある小学校の同一児童によって書かれた、小学校1年時と2年時の作文である。作文のテーマは「全校遠足」で、Jが38名、日Fが28名、母Fが15名である。分析対象とした作文は計162件である。

各作文に関し文字数、文数、複文数を調べる。次に複文の従属節に見られる接続形式を抽出する。特に、「～て」節の出現頻度と機能(継起、付帯・様態、手段・方法、並列、理由)を分類した。その結果を1年から2年への経年変化とJ・日F・母Fで比較した。

結果

文数と文字数は3群とも増加し、産出量が増えた。複文割合ではJと母Fは1年から2年にかけて低下する一方、日Fは増えて

	1年J	2年J	1年日F	2年日F	1年母F	2年母F
文字数	124.05	231.61	127.54	189.79	94.6	159.60
文数	5.13	8.92	6.11	7.00	4.2	6.67
複文割合	62.05%	51.91%	43.85%	51.02%	60.31%	55.0%
接続形式の種類	11	17	7	14	6	11
「～て節」割合	63.6%	49.9%	20.0%	67.9%	55.5%	48.6%

いる。出現した接続形式は、学年にかかわらず、Jは他の2群より多様であった。「～て」節の接続形式における割合は、Jと母Fは、2年になると下がるのに対し、日Fは大きく上がった。機能を見ると、Jは2年時に、5つ理由・継起・付帯の機能を同程度の割合で使用しているのに対し、日Fは2年時でも継起が半数以上を占め、その使用には偏りがみられた。本結果から日FはJ・母Fとも異なる特徴がみられ、特に機能の多様化が遅れている可能性が示唆された。

参考文献 益岡隆志(1997)「新日本語文法選書2 複文」くろしお出版